

通信教育部メディアスクーリング
経済学（2017年度撮影）

経済学

（資本と利子から経済を考える）

第12回

法政大学 法学部

水野和夫

第12回目のテーマ

- ▶ グローバリゼーションはいつから始まったのか？ ・ ・ ・ 12-13世紀の東方貿易（＝胡椒）
- ▶ グローバリゼーションと近代の関係
・ ・ ・ 相互依存

胡椒（中世）からエネルギー（近代）へ

グローバリゼーションの始まり

より遠く

東方貿易(11世紀～)
＝**胡椒貿易**、マルコ・ポーロ(1271～1295)

十字軍(1096年～)

「大航海時代」(1492年～)＝**胡椒**

より合理的に

「科学革命」(1630年代)(コペルニクス～ニュートン)

『リヴァイアサン』(1651年)

より速く

「動力革命」(「鉄道と運河の時代」)＝化石燃料
「電気と自動車の時代」

IT

スパイスは「中世と近代との仲介者としての役目を果たした」

エネルギー源への需要

1215年、利子の公認

「海の時代」

「石油の世紀」

資本主義の始まり

1428年、食料品商同業者組合、法人資格

〈特許会社としての株式会社〉
1556年、モスクワ会社
1600年、イギリス東インド会社

18世紀半ば、現在の株式会社

富（資本）の「蒐集」の終わり
＝ゼロ（マイマス）金利

▶ 胡椒の産地

原産地：**インド南西マラバル地方**

現在ではインド・インドネシア・マレーシア・ベトナム・スリランカ・ブラジル・カンボジアなどの熱帯地域で栽培されています。

今日、胡椒の取引に際しては、産出国の国名や地名を付しています。

マラバル胡椒、テリチェリー胡椒、アレッピー胡椒----- インド産

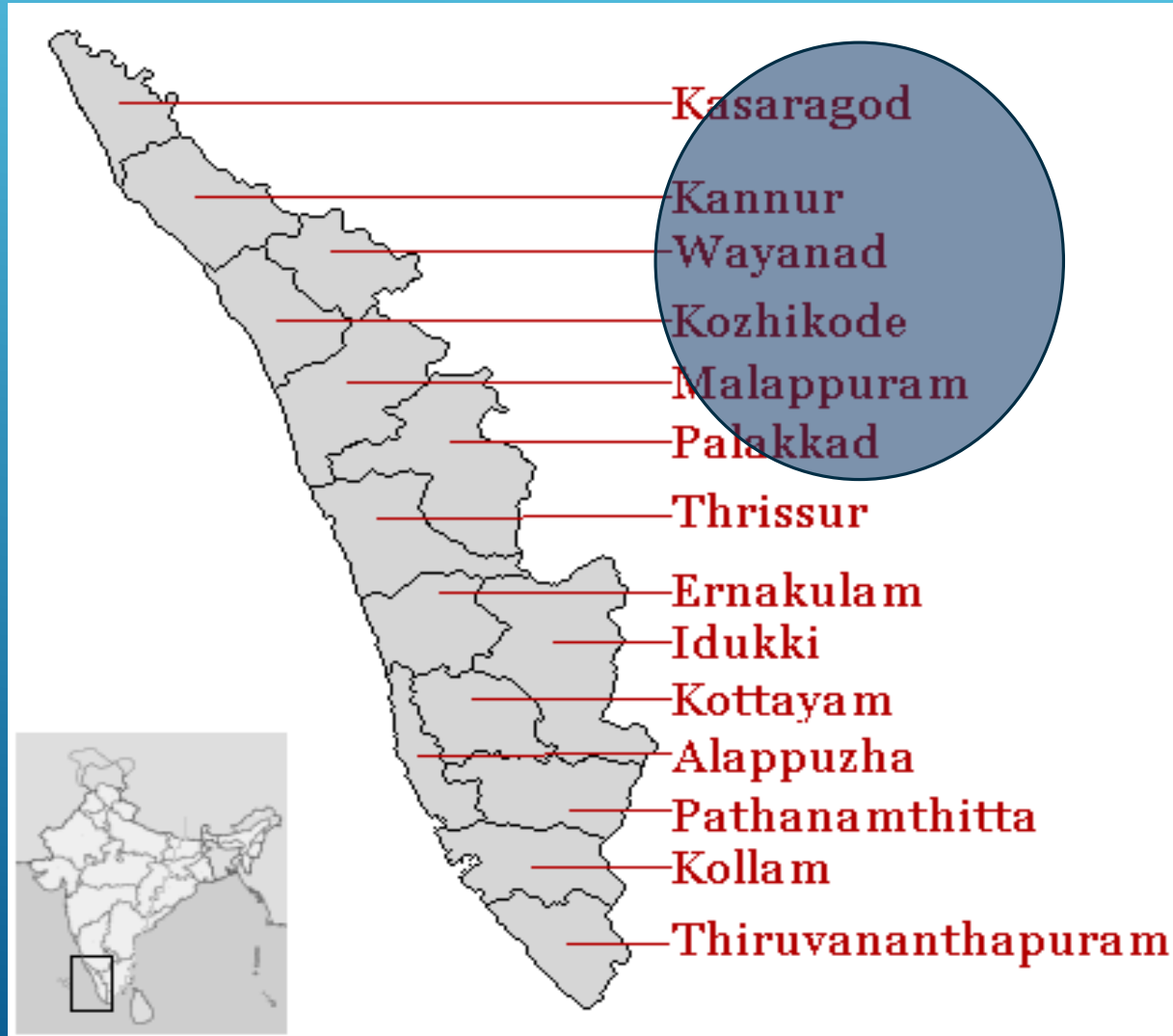
ランポン胡椒、ムントク胡椒-----インドネシア産

サワラク胡椒-----マレーシア産

ブラジル胡椒-----ブラジル産

世界各国で胡椒についての 産出国グレード規格、輸入国規格などがもうけられているが、現在の日本では、そのような輸入規格は確立されてなく、スパイスメーカーなどが、輸出国規格を利用したり、自社規格を設定して品質の確保に努めています。

原産地：インド南西マラバル地方・・・KASARAGOD（カーサゴード県）、KANNUR（カンヌール県）、WAYANAD（ワイナード県）、KOZHICODE（コーリコード県）、MALAPPURAM（マラップラム県）、PALAKKAD（パラッカド県）



胡椒貿易とグローバルゼーション

『胡椒 暴虐の世界史』（原著2013、アンジョリー・シェーファー、白水社、2015、栗原泉訳）

第1章 コショウ属

古代ローマ、
胡椒は万能薬
(p.16-17)

人類史のほとんどの時代を通じて、胡椒は手に入りにくいものだった（熱帯以外の地ではどうしても育たないという事実こそ、**胡椒が世界史にこれほど大きな影響を与えた理由**の一つ）。

西欧では、胡椒を料理に不可欠なものにしたのは古代ローマ人。

古代ローマ人にとって胡椒は、今日わたしたちがよく使うアスピリンのようなもので、（略）**万能薬**だった。

ディオスコリデス（40頃-90年）『博物誌』（皇帝ネロの時代）・・・発熱に伴う震えを抑え、毒をもつ動物に噛まれたときの処方として、胡椒入りの飲み物や軟骨を薦めた。

中世ヨーロッパ、富豪は胡椒熱

古代インド、
「毒払いの力」

中世ヨーロッパ、富豪は胡椒熱（p.18-19）

古代インドの「アーユルヴェーダ」（紀元前8世紀ころ）…サンスクリット語で黒胡椒を「マリチュ」というが、これは「**毒払いの力**」を意味する。

胡椒は中世のヨーロッパで食材として定着
胡椒はまた薬屋の商売に不可欠なもの。

優れたスパイスとして評判の高い胡椒を、中世の金持ちたちはなにがなんでも手に入れたがった。
当時の富豪は**胡椒熱**に浮かされていた。

胡椒を使った料理を楽しめるのは一つの特権とみなされ、
（略）たいいていの人にとって胡椒は高嶺の花であった。

1439年、イングランドでは胡椒の1ポンド（約453グラム）の値段は二日分の賃金を上回る金額だった。

コロンブス、胡椒の実を携えて航海

胡椒取引の利益を独占
(p.19)

p.20

ヨーロッパ大陸の人びとを未知の海での冒険に駆り立てたのは、胡椒と胡椒がもたらしてくれる富に対する途方もない欲求であった。

胡椒の物語はこの欲求を背景に始まった。
大航海時代の幕を開けたのは胡椒である。

ヨーロッパ人は自前の船でアジアに行き、アラブ人仲介業者を介さずに胡椒取引をして、その巨額な利益をすべて自分たちのものにしたかったのだ。

1492年、コロンブスは胡椒の実を携えて航海に出た。

しかし、ヨーロッパ人は別の種類の人たちだった。彼らは胡椒貿易を牛耳ろうとした。それは、供給地である港湾都市を支配することだった。

アメリカのアジア介入・・・胡椒貿易

ヨーロッパの 胡椒貿易の歴史

p.21

ポルトガル人・・・胡椒取引独占の失敗
イギリス東インド会社vs.オランダ東インド会社
アヘン貿易(オランダ人)

19世紀、胡椒貿易が海賊活動に脅かされると、(米国の)アンドリュー・ジャクソン大統領はスマトラに軍艦を派遣した。**これが東南アジアでアメリカが公式に武力介入を行った初めてのケース。**

中世ヨーロッパの人たちは野生の胡椒を見たことがなかったから、胡椒の起源についていろいろと想像をまくしたてた。

13世紀の『百科事典』(イギリス人バーソロミュー)・・・胡椒は森の木になり、その森はヘビに守られている。

古代ローマの富＝金銀、胡椒

第2章 スパイスの王

「中世には土地の売買や納税に黒胡椒が使われた。人の財産は、その人の家にどれほどの胡椒があるかで表した。

ローマの富＝
金銀、絹、そして胡椒 (p.33)

408年、ゴート人アラリックが率いる蛮族の軍がバルカン半島からイタリア北部へ侵入しローマへ向かった。
ローマ軍は東からの侵入には備えがまったくできていなかった。

蛮族は首都ローマの富を要求してきた。金銀、高価な絹の長衣、そして胡椒を求めた。

ゴート人アラリックがローマを包囲した頃には、ローマ人はすでに何世紀にもわたって料理や薬用に胡椒を使っていた。

胡椒は料理の味を引き立ててくれるだけでなく、解毒剤としても珍重されていた。

十字軍と胡椒

5世紀に胡椒貿易は途絶
(p.34)

ローマ人はすでに1世紀にはインドの西岸沿いの港々で胡椒の取引をしていた。ローマの船が紅海からインド洋を渡ってインドに到達するまで、わずか40日しかかからなかった。

ところが、5世紀にローマが蛮族の手に落ちると、盛んだった胡椒貿易は途絶えてしまう。

中世の支配階級
(p.35)

十字軍を機に、中世ヨーロッパ人はアラブ世界の目もくらむような富を目にすることになった。胡椒の芳香、絹織物やビロードの柔らかな手触り、砂糖の甘さを初めて経験した。

支配階級の人びとは胡椒やクローブやシナモンをふんだんに使った料理でなければ食べるに値しないと思っていた。

東方貿易は胡椒の同義語

胡椒＝防腐剤
説の誤り

中世の人びとは腐りかけた肉のにおいを隠すため、あるいは肉の防腐剤として胡椒を求めたと言われるが、そうではない。さまざまな香辛料を使ったのは主に富裕層だが、金持ちたちはいつでも新鮮な肉を手にいれることができた。

ヴェネツィア、
胡椒貿易支配

中世ヨーロッパで胡椒貿易を支配していたのは「アドリア海の女王」ヴェネツィアであった。

東方貿易＝胡椒
(p.37)

「東方貿易は胡椒の同義語であった」(歴史家ジョン・キー、「the Spice Route」2005)

ヴェネツィアが栄華を誇った15世紀、複雑なルート

アラブ人やインド人の船がインド洋を抜けて紅海へ、→沿岸の港々でスパイスを下す→陸路エジプトへ→ナイル川を下って、→アレキサンドリアへ→ヴェネツィアやジェノバの船が地中海を渡ってイタリアへ

スパイスへの欲求とエネルギー源への需要

スパイスへの
欲求とエネル
ギー源への需
要(p.37)

18世紀は、紅
茶とコーヒー

歴史家ヴォルフガング・シヴェルブッシュ(1941~)『楽園・
味覚・理性』

「スパイスへの欲求と「現在の」エネルギー源への需要
とが、似通った力を発揮したことは、歴史が証明してい
る」

スパイスは「中世と近代との仲介者としての役目を果
たした」

胡椒が中世人の想像力をかき立てたのは、一つには当時
の日常生活が悲惨なものだったからだろう。

(10世紀から18世紀、広範な飢餓が89回)

18世紀になると、東方からの輸入品として胡椒以外の商
品、とくに紅茶とコーヒーが圧倒的に好まれるようになっ
た。

東インド会社の起源＝中世スパイス商人

東インド会社 と胡椒 (p.41)

胡椒は現代の地球規模貿易の始まりにつながっているが、これは胡椒の価格を決め、利益を計算するための組織が必要になったことによく表れている。

こうした組織はのちに北部ヨーロッパにおける資本主義の興隆に一役買った。

イギリス東インド会社は、世界史上初の株式会社であったが、歴史家たちによれば、その起源は中世スパイス商人(スパイサー、ペッパラーなどと呼ばれた)にある。

胡椒の輸入販売を手がけたこれら富裕な商人たちは、やがて自分たちの利益を守るために同業組合(ギルド)を結成した。もっとも影響力のあったのは「ロンドン胡椒商人ギルド」であった。

1428年、食料品商同業組合、法人として勅許

法人として勅
許(1428年)
p.41

14世紀の半ば、「胡椒商人ギルド」は「**食料品商同業者組合**」(**グロース・カンパニー**)へと再編された。この組合の名称は、25ポンド以上を計る「大竿秤」(グレートビーム)あるいは「ペソ・グロッソ」(約50キロの重量)と関係がある。「**グロサー(食料品商)**」とは、ペソ・グロッソで取引する人(つまり卸売業者)を意味した。

1428年、食料品商同業者組合はヘンリー6世から**法人として勅許**を与えられた。これにより**土地の取得と保有**が認められたうえ、竿と分銅の適正な使用を監督する権限が与えられた。

1447年、組合は国の公認の「ガーブラー(篩にかける人)」となった。ガーブラーとは、スパイスを検査して混ざりものがないかを調べる検査官である。